

歴史・文化と人がつくる交流都市の構築 地域特性の粋を集めた未来のまちづくり

歴史の重要な転換点にある 橿原市の現在地

奈良盆地南東部に位置し、中南和地方の拠点都市としての存在感を発揮する橿原市は、平成28年に市制60周年を迎えた。

また、この年は「神武天皇崩御2600年」という重要な節目の年でもあった。

神武天皇陵の所在地には古来、諸説あったようだが、古事記や日本書紀にも書かれた「神武東征」後に、神武天皇が橿原宮（伝・神武天皇創建）で初代天皇に即位（紀元前660年）し、大和朝廷の基盤をつくったとの故事にちなんで、江戸幕府が現在地の陵墓をまず整備しようとしたこと、その事業を明治政府が継承し、明治20年代から現在の形に整備し直されていったことなどが、各種資料に出てくる（山川出版『奈良県の歴史』他）。さらに旧橿原宮の再現ともいえる、神武天皇を主祭神

とする橿原神宮が、地元有志の運動を受ける形で、明治天皇により明治23年に創建された。橿原市はその結果、日本国のはじまりの地として、改めて国民的な認識を得るようになり、現在に至っている。ちなみに平成28年は「神武東征」の出发点とされる宮崎市と、到達点の橿原市との姉妹都市盟約50周年の節目とも重なっている。

「節目ということでは、平成28年から29年にかけての時期は橿原市にとって、過去の歴史からのつながりという意味での節目だけでなく、現在から未来にかけての『将来的なまちづくり』への節目とも重なっています。われわれにとってはこれからの数年間が、新たな転換期になるか否かの重要な時期と考えているのです」

森下豊・橿原市長のその言葉通り、古都・橿原市では現在、歴史的資産の再整備などと併せて、将来を見据えた新たなまちづくりの胎動が始まっている。

もりした ゆたか
森下 豊
橿原市長



平成26年に内閣府の「地域活性化モデルケース」に選定された「飛鳥シティ・リージョン」と呼ばれるまちづくりの構想が、その出发点といえる。

「飛鳥シティ・リージョン」を構成する事業の一部は、その後、地域再生計画（平成27年3月認定）に組み込まれ、『橿原市まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成28年3月策定）』にも位置付けられるなど、少しずつ進化しています。この構想は、橿原市の地域資



春の神武祭(平成28年4月)

源・地域特性ともいふべき『交通・医療・観光』などの分野を組み合わせ、橿原市と奈良県、奈良県立医科大学、さらには隣接する明日香村、高取町などとも広く連携しながら進めている飛鳥地方全体にわたる広域的なまちづくり構想です」(森下市長)

ちなみに冒頭の中南和地方とは、律令国家時代の和国(奈良盆地)中央部から南部にかけての広大な地域を大まかに指している。また飛鳥地方とは飛鳥川流域から大和三山周辺の地域、すなわち橿原市・明日香村・高取町



広大で静謐な橿原神宮の本殿

とその周辺を指す。

さて繰り返しになるが、森下市長の言葉にもある「交通・医療・観光」の3分野こそは、古来より続く橿原市の重要な地域資源であり、地域特性でもある。

例えば鉄道については、近鉄・大阪線、橿原線、南大阪線、吉野線に加え、JR桜井線などが縦横に走り、計13もの駅が設けられている。幹線道路についても南阪奈道路、京奈和自動車道などの整備により、奈良や大阪市内まで約40分、京都・和歌山、また大阪国際空港や関西国際空港へも約60分で結ばれ、ア



幸せの黄色いポストがある橿原神宮前駅(宮崎市との姉妹都市盟約50周年記念)

クセスが良好である。

近代以前の旧街道網においても、奈良・京都・大阪・和歌山、さらには伊勢ともダイレクトにつながっていた橿原の地は、古くから交通の要衝として知られ、畿内地方の物流システムの結節点、周辺一帯の観光の玄関口としての役割を果たしてきたが、現代においてその機能は、格段に向上したといえるだろう。

また医療の分野については、市内に立地する奈良県立医科大学が重要な役割を担うが、飛鳥地方には、製薬事業とその販売・普及を重要な地場産業としてきた歴史もある。

このように、過去の歴史が現代にしっかりと



継承され、将来に向けたまちづくりの基盤として機能し続けていることも、大きな地域特性になっているといえるだろう。

「交通・医療・観光」を 基盤とするまちづくり

それでは橿原市で複合的に進む主なまちづ



大和八木駅前の新分庁舎(上)と交流スペース(下)の完成予想パース

くりの取り組みを、ご紹介していきたい。

まず取り上げたいのは、橿原市の玄関口・近鉄大和八木駅周辺における「中南和地方の拠点都市にふさわしいまちづくり」を象徴する複合施設の建設事業である。

地上10階、地下1階、高さ45mという規模で、大和八木駅南側の市有地を活用して建設中のこの施設は、平成30年春に竣工予定となっているが、「日本初の画期的な複合施設」になる予定だ。

「庁舎の複合施設化は珍しいものではなく



交通結節点である橿原市の中心、大和八木駅からは関空行きのバスも発着

なりつつありますが、橿原市の新分庁舎は全国の市役所で初めて、ホテルと複合するのです(※ホテルは5階〜10階部分。運営はカンデオ・ホスピタリティ・マネジメント)。しかも最上階の展望施設からは、万葉集にも歌われた名勝大和三山がすべて見渡せますので、国内外から訪れるお客さまに、大きな感動を提供することができると考えております(森下市長)

ちなみに新庁舎の高さを45mに設定したのは、「東大寺大仏殿(高さ47m)」を超えないよう配慮した(森下市長)とのこと。平城京や平安京に先立って、日本史上初めて条坊制を



橿原市は奈良県と「まちづくりに関する包括協定」を締結

取り入れた都城・藤原京が築かれたまち、大宝律令で始めて日本国という国号が誕生したまち、ここ橿原ならではの奥ゆかしい配慮といえる。また大和八木駅の北側エリアでも、今後、新たなまちづくり事業を展開していく構想があるようだ。

大和八木駅とともにもう一つ、橿原市の玄関口の役割を果たしているのが近鉄・橿原線と南大阪線が合流する橿原神宮前駅だ。同駅周辺では平成28年3月に、県道・橿原神宮東口停車場飛鳥線が開通し、明日香村方面へのアクセスが格段に向上した。さらに、翌月には都市公園として整備を進めている「新沢千

塚古墳群公園（4〜7世紀に造成された約600基もの古墳がある区域）」に、「シルクの杜（健康増進施設）」や「新沢千塚ふれあいの里（集客・物販施設）」もオープンしている。今後は、飛鳥観光の玄関口としてふさわしい駅前空間の創出も望まれる。

「交通・観光」と並ぶ橿原市の今後のまちづくりの基盤である「医学を基礎とするまちづくり」は、もともと市内に立地している奈良県立医科大学のキャンパスが別の場所に移転する構想の推進とともに立ち上げられた画期的な構想である。この構想を円滑に進めるために、奈良県と橿原市は平成27年に「まちづ

くりに関する包括協定」を締結している。

「奈良県立医科大学の敷地の中には医科大学の校舎だけでなく、各種研究施設とともに、特定機能病院にも指定されている奈良県立医科大学附属病院が立地しています。新キャンパスが出来上がれば、主要な研究施設もそちらに移転する予定ですが、旧キャンパスの跡地も活用し、病院機能を強化する予定と聞いています。同時に、医療を基盤にした地域貢献にも力を入れる予定で、橿原市ではそのまちづくりの部分において、連携を強化していく予定です」（森下市長）

実際、県立医科大学のキャンパ

ス移転については、既に関連するさまざまな事業計画が立案され、あるいは既に着手されている。例えば、現在の県立医科大学の最寄り駅である八木西口駅と畝傍御陵前駅の間には、新駅を建設する構想がある。また周辺の道路整備や街並み整備、健康増進施設の建設や医療関連の企業誘致（雇用の創出）などについても、その環境が整いつつある。

汎用性の高い

「まちなか健康拠点」の取り組み

「医学を基礎とするまちづくり」構想で想定されている事業は、次のようなものが挙げられる。（奈良県立医科大学公式サイト『医学を基礎とするまちづくり』事業概要より抜粋）

「事業計画①医大周辺地域における高齢者の外出行動、健康、都市空間の相関に関する研究／②橿原市との連携によるまちなか健康拠点・ラボの整備／③気象情報、ビーコン、自販機センサー等によるIoT宅外機械見守りシステムの実証と実用化／④スマートメーター、音・湿・照度センサー、身体表面検知システム、バイタルセンサーによる宅内機械見守りシステムの実証と実用化／⑤医療介護専門職や宅配業者、成年後見人ら多職種連携



500軒もの伝統的建造物が並ぶ今井町



史上初の幹線街道の交差点(八木町)

による人の見守りシステムのモデル構築と実用化／⑥地域のケーブルテレビ会社と連携し、MBTのみならず、奈良医大全体の広報活動としての「おしえて！奈良医大」の実践」これらの事業はまず、医科大学にも近接する「今井町（重要伝統的建造物群保存地区）」を中心に実施されていく予定だ。

「対象エリア内の高齢者を中心に、医療機関や介護施設との関係、また、家族の役割を補完するような、新しい共助のシステムをつくろうというイメージです。さらに医療・介護・生活支援などの有機的な組み合わせを図り、その相乗効果による『健やかなまち』の実現を目指していきます。今井町は、医科大学とも近く、高齢化も進んでいる地域なので、取り組みの効果はより一層大きくなるものと期待しています。また、空き家対策としても、まちなかラボ（大学のサテライト施設等）を設けたり、まちなか健康拠点（病院のサテライト施設等）を設けたりすることは有効であり、医療を提供する側にも受ける側にも、非常にメリットが大きいと思います」（森下市長）

空き家対策としては、ゲストハウスやシェアハウスの設置も考えられており、この地区の特色を生かしたユニークな事業といえる。伝統的な町並みや地域の歴史に惹かれて外部から訪れる人々と、地域住民との交流が生まれるれば、新たな地域活性化の種も自然発生するのではないだろうか。



大和三山の一つ耳成山を望む地にある藤原京跡

特に注目されるのは、まちなか見守り拠点の存在である。ここでは、例えば県立医科大学附属病院での急性期医療（入院）が終わって回復期、療養期に入った市民（特に高齢者）が、在宅医療に転じる際などの医療的ケアや、日常的な健康推進指導などを中心とした活動が行われるという。

ご承知のように、高齢者や障がいを持つ方々の在宅医療はサポート体制の確立が非常に難しく、その対策が全国的な課題になっている。だが県立医科大学の関与による、高齢化の進むエリアでの面的な試みとして、このまちなか見守り拠点のシステム



町家の改修の様子(今井町)

地域特性の粋を集めた 観光振興への試み

が軌道に乗れば、市域全体への展開はもちろん、全国に向けた医療・介護モデルの新たな発信という観点からも、面白い取り組みに成長するだろう。

市内には、学術的にも非常に貴重な古墳群や日本初の条坊制を取り入れた都城・藤原京跡がある。全国94市町村の114地区が指定されている重要伝統的建造物群保存地区の中でも、歴史的な町並みが面的に保存（約500軒が伝統的建造物）され「奇跡のまち」

とも称される今井町や、300軒もの伝統的な町家残り、古代からの交通の要衝ぶりを如実に物語る「史上初の幹線街道（伊勢に通じる横大路と吉野・紀伊方面に通じる下ッ道）の交差点」とされる八木札の辻が現存する八木町がある。また日本の最古の薬師信仰の寺院とされる本薬師寺跡もある。

このような歴史的資産に恵まれた環境を背景に、平成18年以降、橿原市では奈良県や桜井市、明日香村とも連携して世界文化遺産（飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群）の登録に向けた積極的な活動を展開している。また奈良県と飛鳥地方の3つの市町村が連携し、「日本国創成のとき」飛鳥を翔た女性たち（推古・皇極・斉明・持統などの女帝たちが日本の礎を築いたという史実に基づく、新たな観点からの古代飛鳥地方の物語）というテーマで、平成27年には日本遺産の第1号認定も受けた。

「このように恵まれた地域資源・地域特性と、進化した現代の交通の要衝としての強みを生かし、今後は大阪・京都・神戸への中継点としても機能する（観光ハブ都市）を目指したいと思っています」

そう語る森下市長は、さらに「新しい形の医療ツーリズム」にも意欲を見せる。奈良県立医科大学との連携で構築される高度なまちなか医療環境（まちなか健康拠点をはじめとするさまざまな取り組み）が実現すれば、県立医科大学附属病院での受診や治療を主目的

としながらも、今井町や八木町などに残る伝統的町家での癒やしツアー、世界文化遺産候補や日本遺産にまつわる地での古代史ツアーと組み合わせるなど、さまざまな企画が期待できる。

さらに、大和八木駅前に建設中のホテルの最上階から、眼下に広がる町並みや大和三山を見わたせるような機能やアイテムが加われば、人気沸騰は間違いない。

予断するには早いですが、医師でもある森下市長ならではの、橿原市の地域特性の粋を集めたような、卓越したアイデアがきっと生まれるに違いない。

（取材・文＝遠藤隆／取材日平成29年2月27日）



町家を改修して利用している「今井放課後児童クラブ」(今井町)